

令和7年11月18日に発生した大分市大規模火災に係る 消防庁長官の火災原因調査報告書（概要）

総務省消防庁

1. 火災の概要

火災の概要

(1) 出火日時等

- 出火時刻: 令和7年11月18日17時30分頃
- 覚知時刻: 令和7年11月18日17時45分
- 鎮圧時刻: 令和7年11月20日11時00分 半島部分
令和7年11月28日13時30分 蔦島部分
- 鎮火時刻: 令和7年11月28日13時30分 半島部分
令和7年12月4日14時00分 全域鎮火

(2) 出火場所: 大分県大分市大字佐賀関地内

(3) 死傷者数: 死者1名、負傷者1名

(4) 焼損範囲: 約6.39ha

林野等 約4.06ha(うち蔦島約1.63ha)

街区 23,321㎡

(5) 焼損床面積: 12,563㎡

(6) 焼損棟数: 196棟(うち全焼167棟)

(令和8年3月4日現在 大分市消防局調べ)

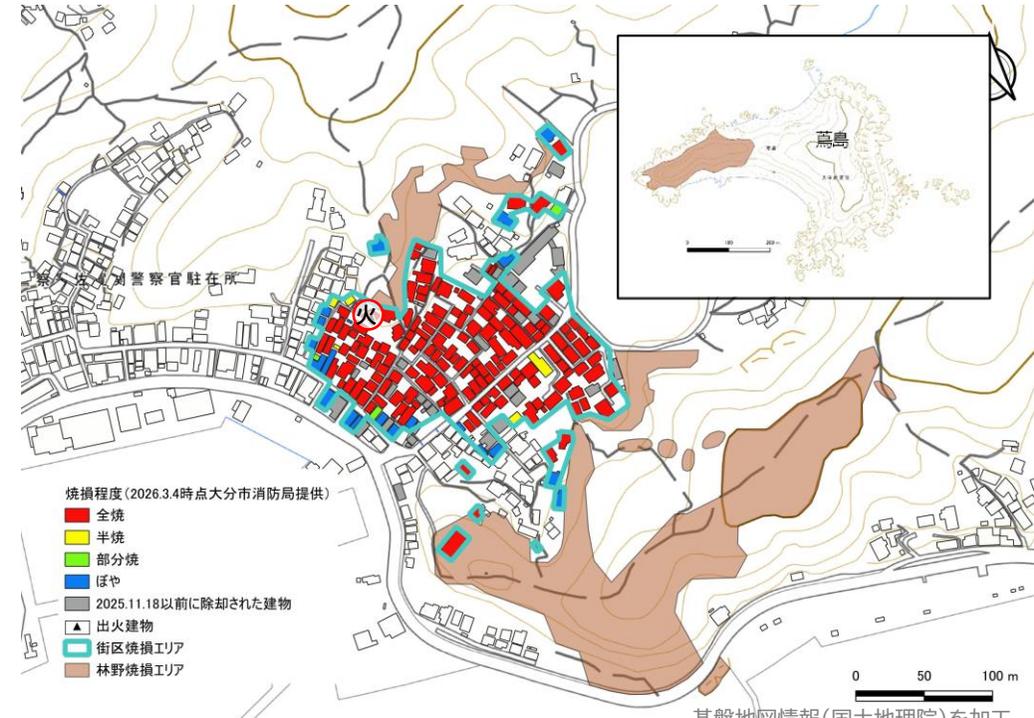


位置図



火災及び消防活動の状況

(大分市消防局提供)



焼損状況

○ 空き家の焼損状況: 全焼44棟、半焼以下5棟

都市計画・消防計画等

(1) 用途地域指定: なし(建蔽率: 70%、容積率: 400%)

(2) 防火地域・準防火地域指定: 指定の対象外

屋根不燃化区域指定: なし

(3) 延焼警戒区域指定※: あり

狹隘地区警防計画策定※: あり

※平成29年7月に消防庁が通知した「延焼の危険性が高い地域の指定」及び当該地域の「火災防ぎよ計画」に当たるもの

※右図「焼損状況」データ作成方法

- 基盤地図情報の建物データを用いた。
- 焼損状況: 大分市消防局からの情報による(3月4日現在)。
- 除却建物: 大分市消防局からの情報、Google Map判読、現地調査、大分県・大分市消防局・大分県ドローン協議会・大分大学により撮影されたドローン画像の判読による。

2. 地域の状況

- 住宅は、漁港から丘陵のふもとの標高約0~10mの傾斜地に主に立地(出火建物:標高約10m)する
- 狭い路地に住宅が密集する
- 人口・世帯数ともに減少傾向にある
- 大分市の中では空き家の多い地域(焼損範囲内に63件(第2期大分市空家等対策計画))
- 焼損エリア内の空き家の中には瓦の割れ・ずれや外壁の剥がれ・損傷、敷地内の草木の繁茂などの火災予防上管理が不十分なものも見られる(右写真)
- 建物が除却された空地も散見される
- 昭和46年以前に建築された建物も少なくない



大分市佐賀関で見られた瓦のずれ
火の粉による飛び火に対する脆弱性が懸念(空き家)



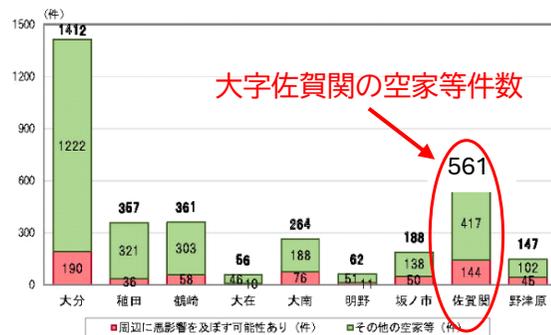
大分市佐賀関で見られたトタン板の剥がれ
延焼に対する脆弱性が懸念(空き家)

焼損建物の建築年代
(大分市提供データより作成)

建築年代	棟数
昭和46年以前	92
昭和47-56年	44
昭和57~平成元年	13
平成2~平成11年	5
平成12年~	4
不明	38
総計	196



道路幅員
(大分市土木建築部提供データより作成)



大分市の空き家等の件数(第2期大分市空家等
対策計画(令和4年3月)より)

3. 気象

○佐賀関アメダス(火元建物から西へ約1.3km)では、火災前30日間の合計降水量は38.5mmであり、平年比37%に相当。

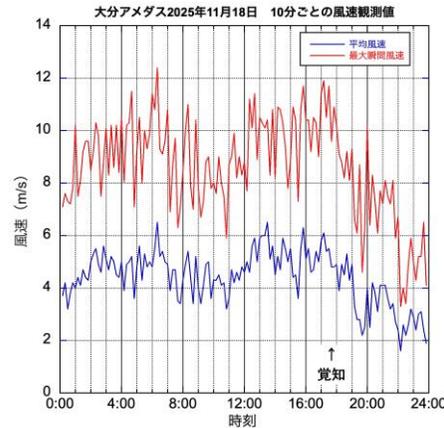
○また、10月31日に22.5mmの降水があった。

○出火した11月18日の実効湿度*は約67%であった。

*実効湿度:木材の乾燥の程度を表す指数で、それまでの相対湿度を考慮に入れて計算される。大分地方の乾燥注意報の発令基準は「最小湿度45%で、実効湿度65%」となっている。

○同日は冬型の気圧配置となり、海上を中心に強い北西の風が吹いていた(強風注意報)。

○大分アメダス(火元建物から西へ約24km)における出火日の平均風速及び最大瞬間風速は右のとおり。



○なお、火災現場の消防隊から、風向風速の変化が報告されている。

火災現場においてウェアラブルカメラで撮影された映像から判断された風向

時間	風向	時間	風向
18時20分ごろ	南西	19時10分ごろ	西
18時38分ごろ	北西	19時14分ごろ	北西
18時43分ごろ	北	19時20分ごろ	北西
18時45分ごろ	南西	19時43分ごろ	南西
18時49分ごろ	南西		

4. 出火原因

○最先着した消防隊によると、指令先の木造2階建て住宅(①建物)は火災最盛期で火炎が上方高く立ち上がっており、その東側に位置する木造平家建て住宅(②建物)も炎上中であった。①建物は南側の開口部から火炎が噴き出しており、その火炎を激しく受けることで、南側の建物(③建物)の北側軒先及び建物内に延焼していた。

○②建物及び③建物は空き家であった。

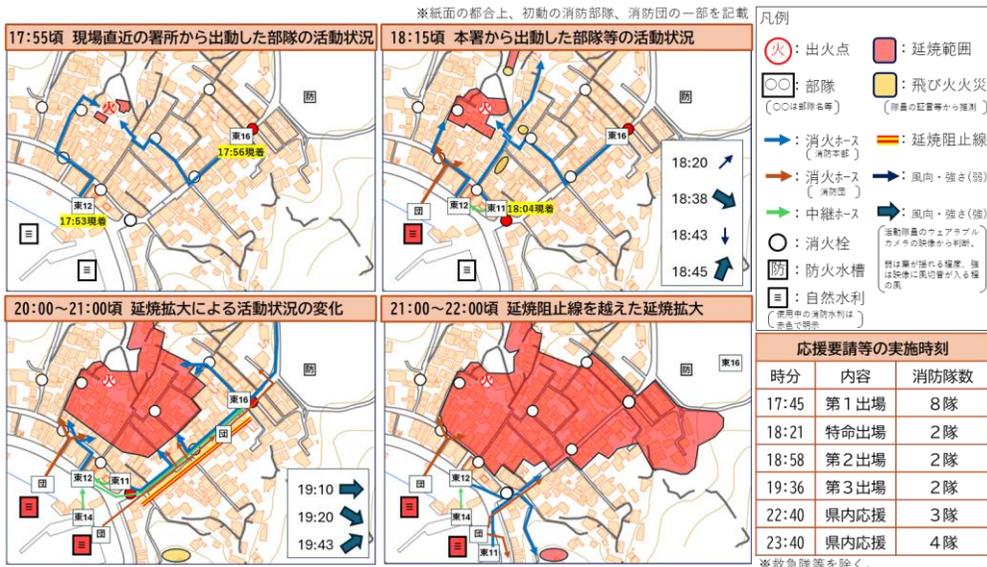
○現場到着時は、北の風が強く吹いていたため延焼速度が速く、更に多量の火の粉が飛散しており、飛び火による延焼の危険性が高かった。



○暖房器具、たばこ、電気機器、屋内配線及び放火について検討した結果、全体的に焼損が激しく火源を特定できる物証が認められないため、本火災の出火原因は不明とする。

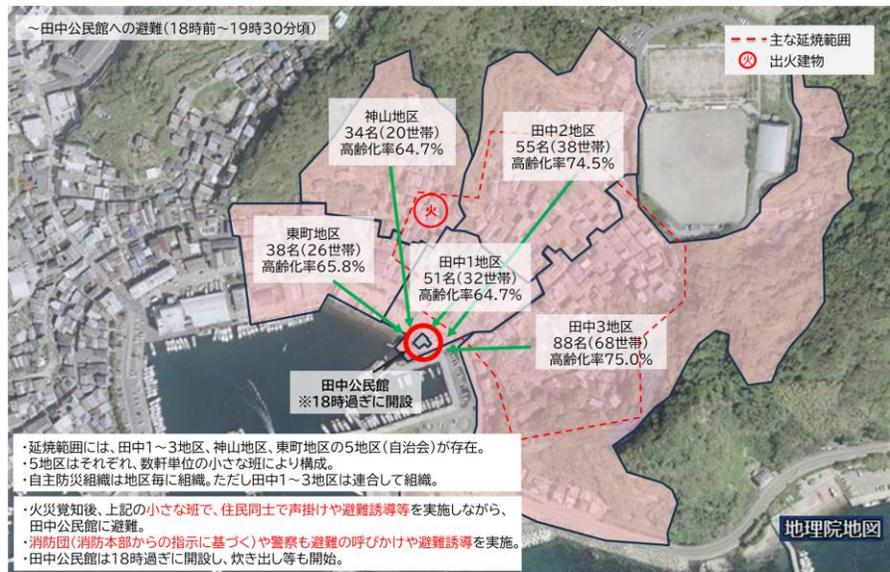
5. 消防活動、住民の避難状況

○消防活動の概要



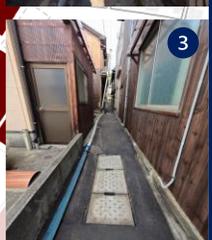
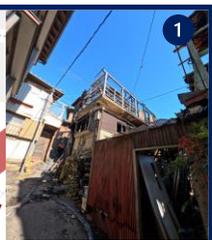
- (第1回大分市大規模火災を踏まえた消防防災対策のあり方に関する検討会資料4より)
- 第一通報は火元建物の約100m東の住民「西の方に火が見える。」「木も燃えている。」(既に炎上、延焼)
 - 火元建物が坂と階段の多い細い路地の奥にあったため、消防車が直近に部署できなかった。
 - 風向・風速が変化中、延焼拡大した。
 - 複数の飛び火があり、放水箇所を移動し、退路を確保しつつ、消火活動に当たった。
 - 強風による飛び火が継続し、市道田中線に設定した延焼阻止線を越えて延焼した。
 - 建物が密に並んでいたため周囲の状況把握が難しかった。
 - 大分市の水道網に接続しており、配水池の水位は維持された。延焼拡大に対する放水口数の増加に伴い放水圧力の低下が一部で発生し、自然水利(海水)へ転換した。
 - 林野へも延焼拡大し、18日深夜から山中へもホース展開した。

○住民の避難の状況



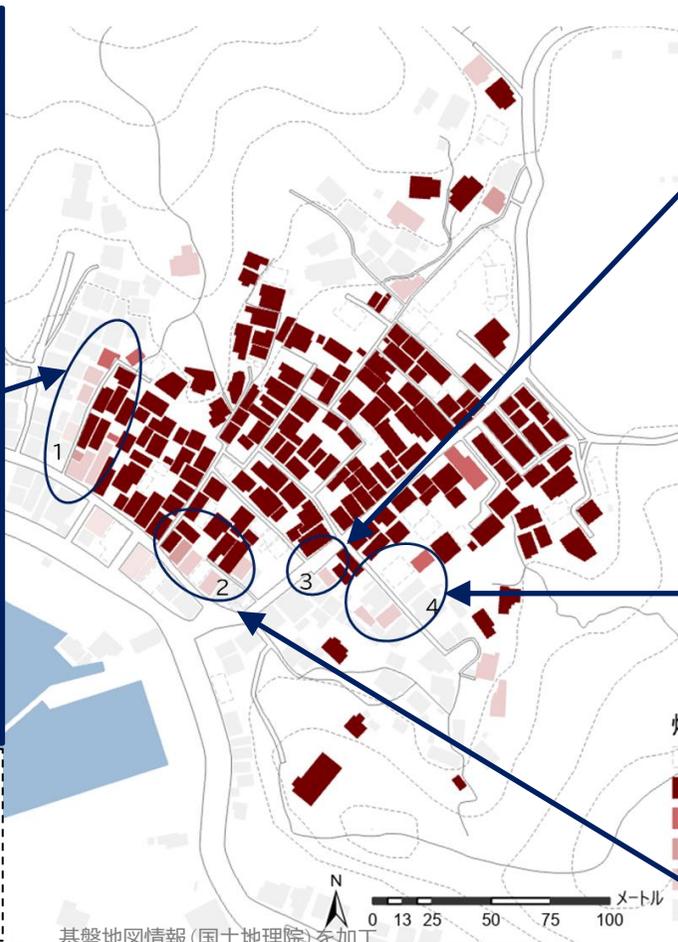
- (第2回大分市大規模火災を踏まえた消防防災対策のあり方に関する検討会資料5より)
- 大分市消防局は消防団に住民の避難広報と支援を指示。
 - ・対象地区内の住民数は266人
 - ・高齢化率約70%
 - ・災害時要支援者が一定数いた
 - 自治会役員、民生委員などが個別に訪問を実施。
 - 住民の防火意識の高さ※、日常的な防災活動※※が迅速な避難につながったとされる。
 - 福祉施設が車両による避難支援を行った。
- ※火災を知りえた住民が声を掛け合って自宅周辺に散水をしたなど (大分大学減災・復興デザイン教育研究センターの調査による)
 ※※ 年一回の自治会の防災訓練、災害時要支援者情報の共有、個別避難計画の策定など

6. 焼け止まりの状況



古い木造住宅が密集し、南北に延びる幅員約1.3mの狭い通路が焼け止まりとなった。消火活動によるとみられる。

- 消火活動の効果が見られる
- 燃えない外壁が防火壁の役割を果たしたところもある
- 堅ろう建物でも、密接する隣棟や、狭い間隔で向かい合う開口部などから内部延焼した可能性
- 建物の除却は現実的な延焼火災リスク低減方法の一つとして評価され得る



焼損程度

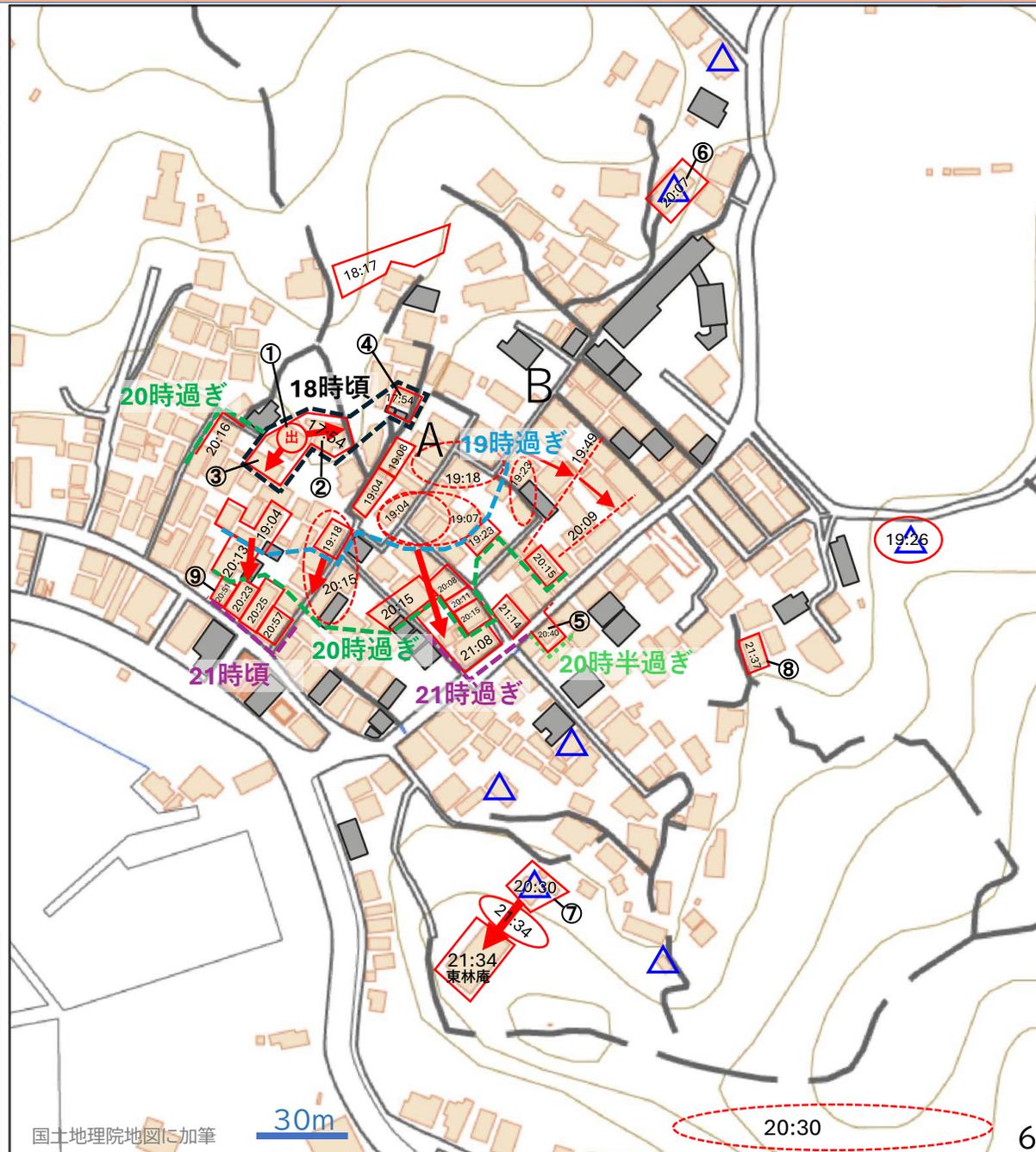
除却
全焼
半焼
部分焼
ぼや
焼損なし



7. 延焼の状況

- 火災時の写真・映像、現地調査の結果、大分市消防局職員からの情報を基に、火災地点を特定し、延焼動態を推定(右図)。
- 飛び火は火元建物から北東～南東の約90度の範囲に分布。
- 火元建物から、風下及び風横方向の延焼速度を求めると、それぞれ34m/h、19m/hとなった*。

*火元から直線的に延焼したと仮定して算出。



焼損範囲内(右地図B地点付近)の防草シートに見られた火の粉により空いたとみられる穴。1㎡あたり75個の5mm以上の穴が観察された。飛び火の危険性が高かったことがわかる。

凡例

- 延焼線 (18時頃)
- 延焼線 (19時過ぎ)
- 延焼線 (20時過ぎ)
- 延焼線 (20時半過ぎ)
- 延焼線 (21時頃・過ぎ)

- 延焼箇所 (明瞭)
- 延焼箇所 (不明瞭)

*延焼箇所内の時刻は燃焼が確認できた時刻であり、出火時刻や飛び火時刻ではない

- ⊙ 出火箇所
- △ 飛び火箇所
- 2025.11.18以前に除去された建物

*延焼線に記した時刻：燃焼状況は建物ごとにまちまちだが、この頃には燃えているというを示す時刻

8. 市街地延焼シミュレーションによる検証

○ 消防研究センターの市街地延焼シミュレーション※を用いる。

○ 入力データ

- ・国土地理院基盤地図情報を一部修正(建物の除却を反映)。
- ・風※※:北西3m/s / 北西4m/s
- ・消防活動:延焼阻止線あり / 延焼阻止線なし。
- ・飛び火は新たな出火点として与える(図の黄色建物)。

○ 結果

- ・放任火災だった場合、焼損棟数が約77%、焼損面積で約69%増える(消防活動の効果として、焼損棟数で約43%、焼損建築面積で約41%を減じたといえる)。

※標高差・放水による延焼の遅延は考慮しない。

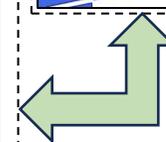
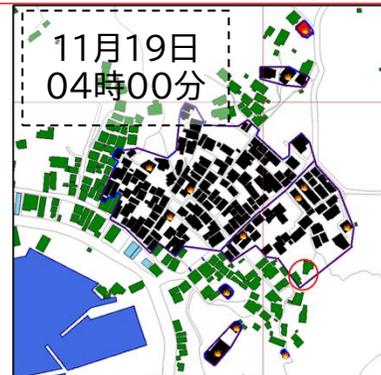
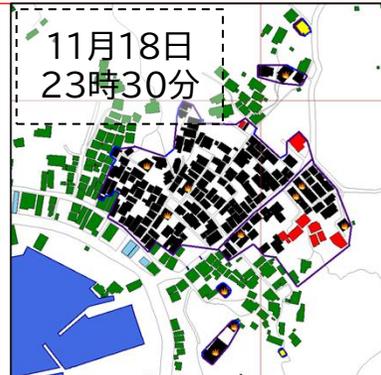
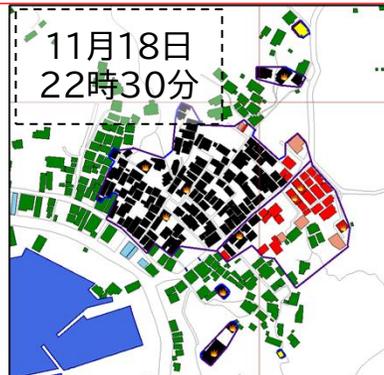
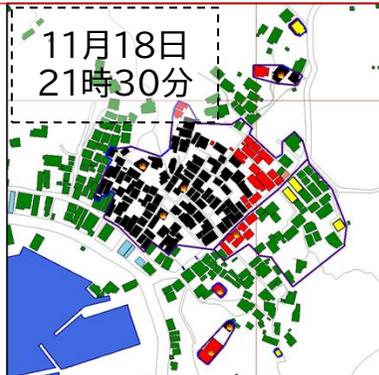
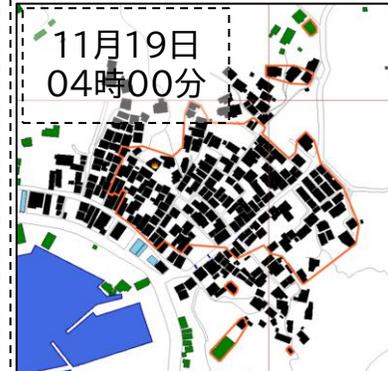
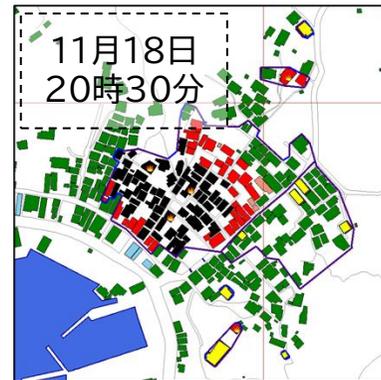
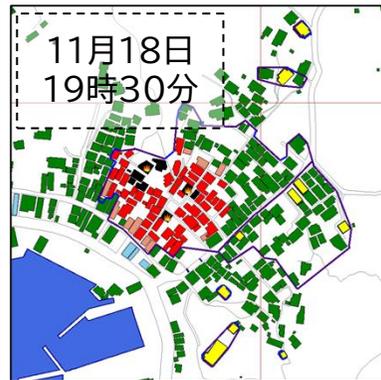
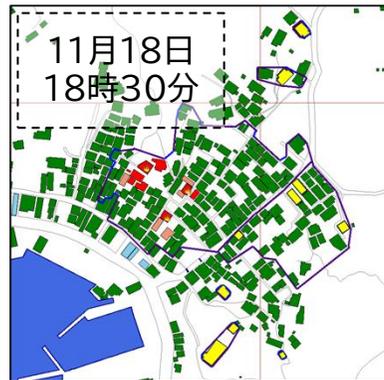
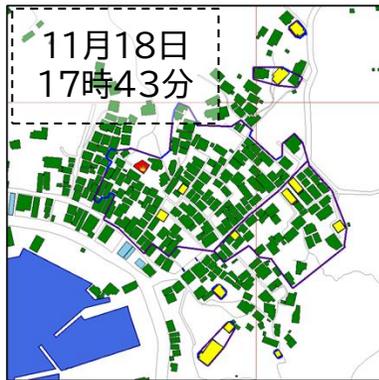
※※実際には出火日は強風注意報が発表されており、また、風向風速は時間的に変化するが、シミュレーションの都合上、平均的な風が一定に吹くという条件で計算。

凡例

 木造建物	 木造建物 (盛期火災前)	 木造建物 (盛期火災後)	 出火点
 耐火造建物	 木造建物 (盛期火災中)	 木造建物 (時間差出火設定)	 延焼阻止線 焼け止まり線

北西の風3mでの計算結果(消防活動を考慮)

消防活動を考慮しない
場合の結果



消防活動を考慮しない場合、より広範囲に延焼し、焼損棟数で約77%、焼損建築面積で約69%増える。

9. まとめ

- 暖房器具、たばこ、電気機器、屋内配線及び放火について検討した結果、全体的に焼損が激しく加減を特定できる物証が認められないため、本火災の出火原因は不明とする。
- 本火災及び被災地域は右表のような特徴を有し、延焼が拡大し、かつ、消防活動が困難であったことが被害要因とみられる。
- 次のような場所で焼け止まりが確認された。
 - ・消火活動によるもの
 - ・建物の防火性能＋消火活動によるもの
 - ・建物の防火性能＋除却空地＋消火活動によるもの
 - ・空地の多い場所
 建物の除却は現実的な延焼火災リスク低減方法の一つとして評価され得るものと考えられる。
- 火災の初期に発見ができなかったことは、隣家が空き家だったことの影響も考えられる。
- 延焼動態を復元した市街地延焼シミュレーションの結果、消防活動により、焼損棟数で43%、焼損建築面積で41%を減じたと評価された。
- 防火意識の高さ、自治会及び消防団等の避難支援により、迅速な避難がなされた。
- 本火災では、水道の配水池の水位は安定的に推移し自然水利(海水)も活用できた。木造密集集落の火災には膨大な量の消火用水が必要であり、放水のための水利を確保できたことは重要。

表 延焼を拡大した要因・消防活動を困難にした要因

地理的特徴	○半島先端の狭窄部に位置しており陸上からのアクセスルートが限られた
集落の特徴	○消防車が入れない道(坂、階段、カーブ、狭あい)が多く存在し、ホース延長が長くなった ○古い建物が多く、密集している場所もあり、延焼の速い場所があった ○狭あいな道に建物が密に並んでいたため、周囲の見通しが悪く、延焼や飛び火に対する警戒が困難であった ○火災予防上管理が不十分な空き家が散見され、延焼や飛び火による火災の発生に影響を与えた可能性がある。
火災・気象の特徴	○降水が少なく※、湿度は乾燥注意報発令基準に近く、強風注意報が出ている中で発生した ※前30日間合計降水量は平年比37% ○火元建物に隣接する2件は空き家であり、第一通報は約100m東の住民からであった ○火元建物住民からの通報はなく、第一通報時に既に火元建物から外部に延焼していた ○火元建物は坂と階段の多い細い路地の奥にあったため、消防車が直近に部署できなかった ○火災初期にホースラインを越える形で南東側へ飛び火が発生し、延焼のおそれのある領域が初期に大きく広がった ○風速や風向が変化したため、延焼や飛び火の方向・範囲が変化した